飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器

1　はじめに

飛鳥地域[1]から出土する７世紀代の須恵器の中に、尾張（猿投窯・尾北窯）産のものが大量に含まれていることについては、すでに昨年度報告したところである（「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』、以下前稿）。その際、尾張以外に美濃（美濃須衛窯）産の須恵器が７世紀の飛鳥地域へ搬入されていることを指摘したが、石神遺跡出土品の整理作業を進める中で、さらに静岡県の浜名湖西岸に位置する湖西古窯跡群（以下、湖西窯）産と目される須恵器の供膳具も一定量含まれていることがあきらかになってきた。これまでにも、難波宮や藤原宮など古代の宮都から湖西窯産の須恵器が出土することは知られていたが[2]、基本的には内容物を運搬するための容器と考えられる壺・瓶類に限られており、供膳具の存在については認知されていなかった。そこで、小稿では飛鳥地域への湖西窯産須恵器の搬入事例を紹介するとともに、それらの存在が提起する土器研究上の問題についても、いささか論及することとしたい。

なお、湖西窯産須恵器は概して次のような特徴を有しており、産地比定については、７～10倍程度の拡大鏡を併用しつつ、基本的には肉眼観察によっておこなった[3]。

①　胎土の粒子は比較的均質だが、尾張産と比べて砂がちで、器壁は厚手である。

②　胎土の色調は、わずかに青味を帯びた明灰白色や明るい黄灰褐色を呈するものが多い。

③　尾張産や美濃須衛窯産といった東海地方産の須恵器に共通して認められる特徴であるが、水挽き成形時のロクロ目が明瞭で、ロクロから切り離した後の底部外面（蓋の場合は頂部）の器面調整に、ロクロケズリを多用する傾向がある。

④　しばしば降灰が釉化するほど高温で焼成されているが、焼成不良品も散見される。

2　湖西窯産須恵器の出土事例

飛鳥地域における湖西窯産須恵器の出土事例として、現時点で筆者らが把握しているのは、石神遺跡と飛鳥池遺跡の２遺跡からである。

石神遺跡（図182）

石神遺跡は、明治時代に須弥山石と石人像が発見されたことから、斉明天皇３年（657）に「須弥山像」をつくって外国使節を饗応したと『日本書紀』に記される「飛鳥寺西」にあたると理解されている遺跡である。検出遺構はＡ・Ｂ・Ｃの３時期に大別され、Ａ期はさらにＡ１期・Ａ２期・Ａ３－１期・Ａ３－２期・Ａ３－３期の５期に細分されている（『紀要 2009』）。これまでに、土坑２基（SK764・SK1285）・溝１条（SD640）と整地層（含炭褐色土）から湖西窯産須恵器の出土を確認している。

SK764　第４次調査で検出した土坑（『藤原概報 15』）。整理箱で４箱分の土器が出土した。土師器には杯蓋・杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・杯Ｇ・杯Ｈ・皿Ａ・鉢Ａ・鉢Ｈ・甕など、須恵器には杯蓋・杯Ｂ・杯Ｇ・杯Ｈ・高杯・壺・甕などがある。

１・２は土師器杯Ａで、２はほぼ完形。いずれにも外面にミガキ、内側面に二段放射暗文を施しており、２には二段放射暗文の間にさらに螺旋暗文を加える。２の口縁が端部を内側に巻き込む形態であるのに対して、１の口縁は端部を巻き込まずに面をなす。３・４は土師器杯Ｃで、３はほぼ完形。いずれにも口縁部にヨコナデ、内側面に放射暗文を施す。径高指数は、３が23.2、４が24.3。５・６は土師器皿Ａ。いずれにも口縁部にヨコナデ、内側面に放射暗文、底部内面に螺旋暗文を施す。７は土師器鉢Ｈ。口縁部にヨコナデを施し、底部外面をヘラケズリで調整する。８は土師器長胴甕。胴部外面と口縁部内面をハケメ、胴部内面をヘラケズリにより調整する。

９～13は須恵器杯蓋。図示しなかったものも含めて、「かえり」をもつもの（９～12）が多く、「かえり」がないもの（13）は少数である。９・11は尾張産で、10は美濃須衛窯産とみられる。14は湖西窯産の須恵器杯Ｈ。口径8.4㎝、外端径10.5㎝。類品が、湖西窯の東笠子第25地点窯[4]・殿田第４地点１号窯[5]などから出土している。15は須恵器杯Ｇ。14・15とも、ロクロからヘラで切り離した後の底部外面には軽くオサエを施すのみで、ロクロケズリなどの調整を加えていない。16・17は須恵器杯Ｂ。いずれも底部外面にロクロケズリを施す。18は須恵器平瓶で、肩部がやや張る。19は底部を欠くため器形を断定できないが、湖西窯の分布圏内に位置する境川遺跡で

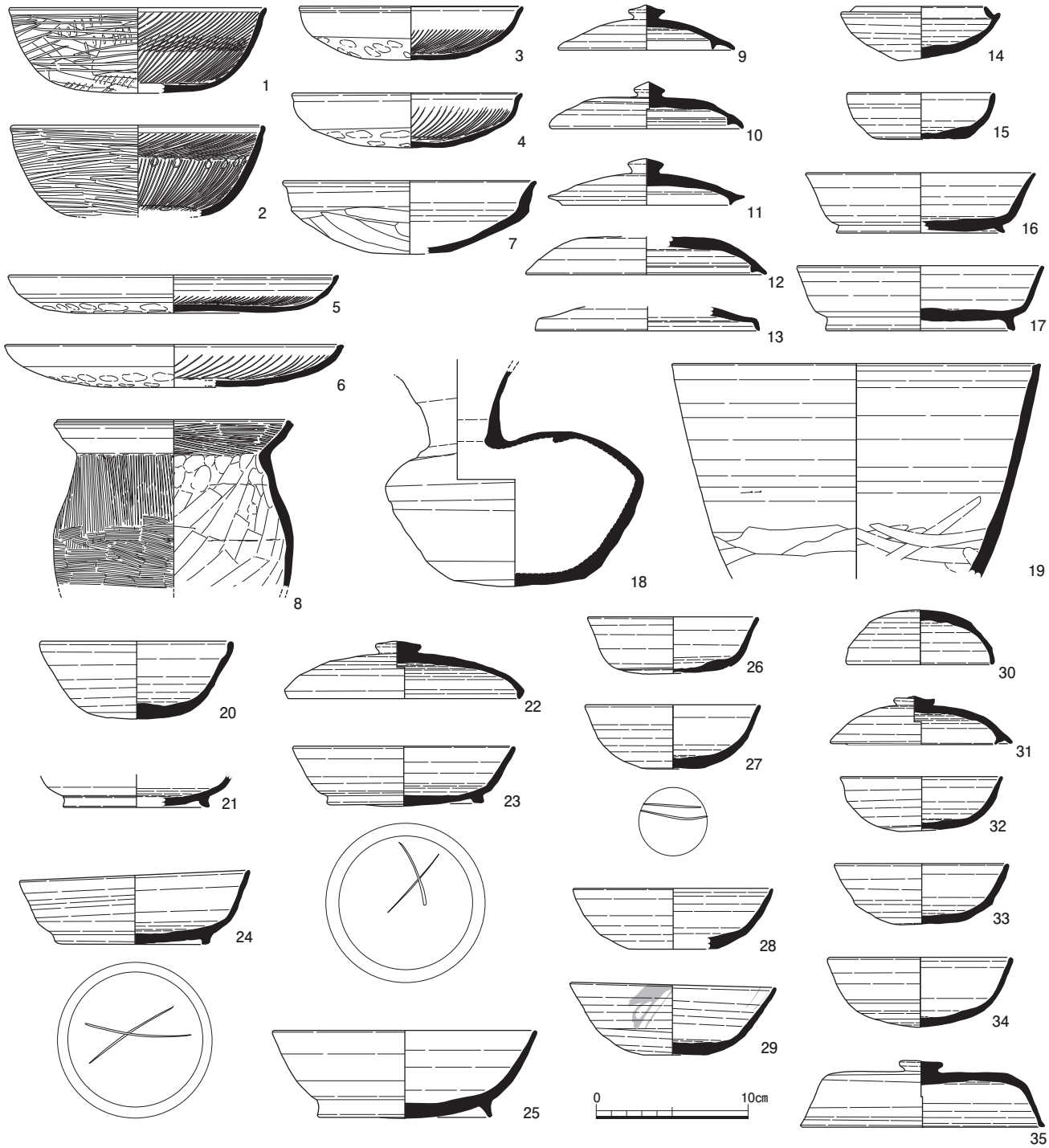

図182　石神遺跡出土の湖西窯産須恵器と共伴土器　1：4

窯跡に隣接して検出された竪穴建物SB02から出土した甑[6]に類似しており、胎土も湖西窯産の14に近似する。内外面とも、口縁部から胴部上半をロクロナデ、胴部下半をヘラケズリにより調整する。

SK764出土の土器群は、高台が低く径高指数が26前後の数値を示す須恵器杯B（16・17）の存在から、飛鳥Ⅳ（以降）に位置づけることができ、土師器杯C（3・4）の径高指数からも飛鳥Ⅳ[7]と見なして問題ない。ただし、土師器杯Aの中に、坂田寺SG100（飛鳥Ⅱ）や大官大寺下層SK121（飛鳥Ⅲ）で確認されるような口縁端部が面

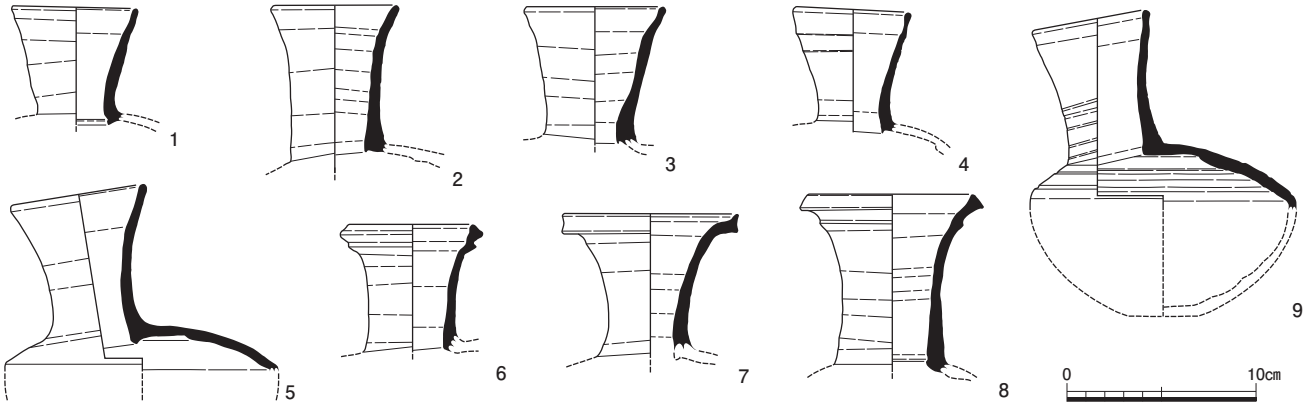

図183　飛鳥池遺跡出土の湖西窯産須恵器　1：4

をなすもの（1）が含まれていることや、「かえり」のある須恵器杯蓋（9～12）が「かえり」のないもの（13）に比べ量的に優位であることに、飛鳥Ⅳでもやや古相を示すとみてよい特徴を指摘できる。

SK1285　第7次調査で検出した大型土坑で、A3期の掘立柱建物SB1300よりも新しい。出土土器は飛鳥Ⅳに位置づけられ、食膳具を中心に多数の尾張産須恵器を含む（前稿）。

湖西窯産須恵器としては、杯A（20）・杯B（21）があり、いずれも類品が東中田A古窯から出土している。

SD640　遺跡の南半部で検出した南北溝。出土土器群は飛鳥Ⅳの特徴を有しており、接続する南北溝SD1347から天武朝の紀年木簡が出土していることからも、飛鳥浄御原宮期のものとみてよい。須恵器には尾張産のものを多く含み、確実視されるものだけで23%、そうである確率が高いものまで含めると38%を占める（前稿）。

湖西窯産須恵器としては、確実視されるものが22～24・26～29の7点で、25は胎土の特徴から湖西窯産と推定したが、窯跡からの出土品に酷似例を見いだしていない。22は「かえり」がない杯蓋、23～25は杯B、26～29は杯A。25以外については、類品が東中田A古窯[8]から出土しており、23・24・27の底部外面に焼成前に陰刻されたヘラ記号や、29に認められる火襷にも、高い共通性が認められる。

含炭褐色土　第5次調査で検出した整地土で、土器・金属器・炭化物を多く含む。A期の遺構を覆い、C期の遺構とされるSD640が掘り込まれる。出土土器には土師器杯A・杯B・杯C、須恵器杯A・杯B・杯蓋などがある。須恵器杯蓋に「かえり」のあるものとないものが一定量共存することなどから、飛鳥Ⅳに位置づけられる。

湖西窯産の須恵器としては、確実視されるものが30～34の5点で、30は杯H蓋、31は「かえり」を有する杯蓋、32～34は杯A。30の類品は東笠子第25地点窯・殿田第4地点1号窯、31～34の類品は東籠田古窯[9]・東中田A古窯などから出土している。35の壺蓋は、胎土の特徴から湖西窯産と推定したが、窯跡からの類品の出土報告例を見いだしていないため、断定を控えておく。

飛鳥池遺跡（図183）

飛鳥寺の東南の谷筋に営まれた7世紀代の複合工房遺跡。谷筋に堆積していた炭層や、谷の左岸で検出した廃棄物処理土坑SK1170から湖西窯産須恵器が出土している。

炭　層　谷筋に堆積していた産業廃棄物の堆積層で、漆壺に用いられた須恵器が多数出土しており、その中に湖西窯産須恵器を少なからず含む[10]。1～6は平瓶、7・8はフラスコ形瓶。炭層の最上層（炭層1）は流出・再堆積しているため、平安時代の遺物がまじるが、2・8は下層にあたる炭層2からの出土で、伴出遺物に30点以上の富本銭とその鋳型、持統天皇元年（687）にあたる「丁亥年」記載のある木簡などがあり、基本的に飛鳥浄御原宮期の遺物と見なされる。1はさらに下層の炭層3相当層（粗炭層）からの出土で、少数ではあるが富本銭も炭層3から出土している。

SK1170　ふいごの羽口・鉱滓・漆壺などの工房関連遺物が多数出土した土坑で、漆壺の中に湖西窯産須恵器の平瓶（9）を含む[11]。伴出の須恵器杯蓋に「かえり」のあるものとないものが共存しており、出土土器は飛鳥Ⅳの様相を示す。

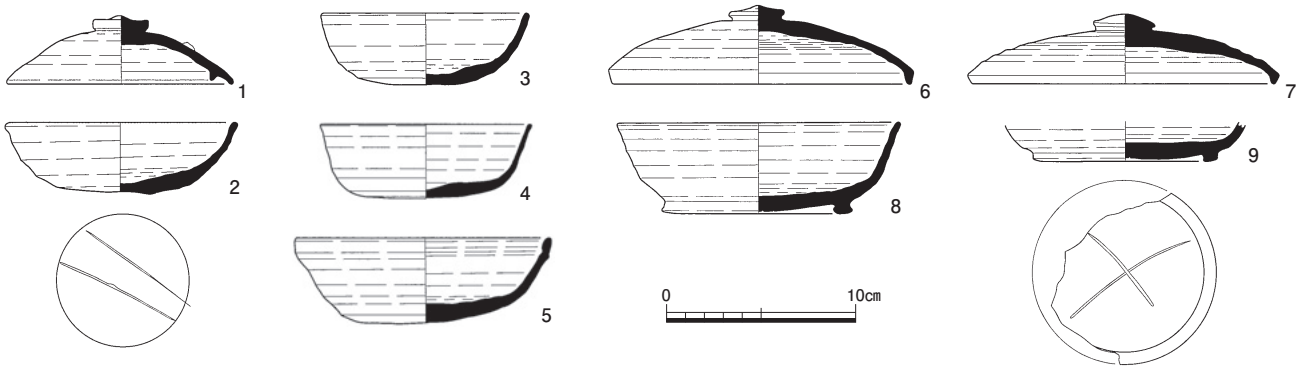

図184　湖西窯出土の石神遺跡出土須恵器類品　１：４　（註８）文献より一部改変

３　湖西窯産須恵器出土の意義

今回紹介した湖西窯産須恵器は、共伴土器に若干の時期差かと思われる様相差が認められるものの、いずれも土器以外の伴出遺物から飛鳥浄御原宮期（672-684）に位置づけられるか、飛鳥浄御原宮期の様相と目される飛鳥Ⅳの土器群にともなって出土したものである。中でも注目すべきは、供膳具である杯や杯蓋が石神遺跡から多数出土していることで、これは飛鳥池遺跡出土の漆壺のように、内容物の運搬容器として遠隔地流通する壺・瓶類とは異なり、須恵器そのものが意識的に飛鳥地域へともたらされたことを示している。

図示した湖西窯産の須恵器供膳具は、全部で20個体にも満たないが、石神遺跡（SK764・SK1285・SD640・含炭褐色土）出土の16個体（14・20～34）は、報告書の刊行に向けて図化候補遺物として抽出した約400個体の須恵器に含まれていたものである。遺構・包含層の性格を考慮する必要があるため、この数値を石神遺跡全体や飛鳥地域全域の様相として敷衍することには慎重を期すべきであるが、計算上は須恵器供全体の約４％、供膳具に限れば５％弱を湖西窯産が占めていることになる。これだけでも、相当量の湖西窯産須恵器供膳具が飛鳥地域(石神遺跡)へ搬入されていたことが理解されようが、筆者らの産地比定能力の限界から、湖西窯産であっても抽出されなかったものが存在するであろうことを考慮するならば、実際の消費量が現状の認識を大きく上回ることすら考えられないではない。

今のところ、先行する時期の遺構・包含層からの出土例は見いだされないので、湖西窯産須恵器の飛鳥地域への搬入は、飛鳥浄御原宮期に急増したと考えられる。こうした飛鳥浄御原宮期に始まる須恵器供膳具の大量搬入は、前稿で紹介した尾張産須恵器にも共通して認められる現象であり、両者には共通した歴史的背景の存在が想定できる。これについては、すでに前稿で示したように、大量の官人層の出現にともなう宮および宮周辺域での人口の爆発的増加と関わるのではないかとの見通しをもっており[12]、湖西窯産須恵器に関する所見もこの想定と矛盾するものではない。

また前稿では、飛鳥地域への大量搬入と時期を同じくして、尾張で猿投窯の分布域の拡大や、尾北窯の興隆といった窯業生産の活発化が認められることを指摘したが、湖西窯でもほぼ同時期に窯の数が増え、生産域が広がっている[13]ことは注目に値する。なぜなら、前稿で尾張における須恵器生産について推定したのと同様に、湖西窯の生産隆盛もまた、宮都への須恵器大量供給と連動した現象ではないかと推測できるからである。

とりわけ、浜名湖西岸でも基本的には遠江国内と考えられる地域にとどまっていた湖西窯の分布が、古代以来の国境と目される境川を越えて隣国の三河へ拡大し、一里山地区[14]を形成するに至っていることは、この問題と関連して重要である。飛鳥地域で出土している湖西窯産須恵器の多くは、明るい黄灰褐色の色調を呈しており、青味を帯びた灰白色を呈するものが多い遠江側の湖西窯製品よりも、三河側の製品との共通性が高く、形態的にも東中田Ａ古窯や東籠田古窯など一里山地区の出土品に類例が多い（図184）。つまり、飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器の多くは、遠江よりも三河からもたらされたものである確率が高いと思われ、23・24・27などに施されているヘラ記号の酷似例が東中田Ａ古窯出土品に多数認められることは、その傍証となるだろう。

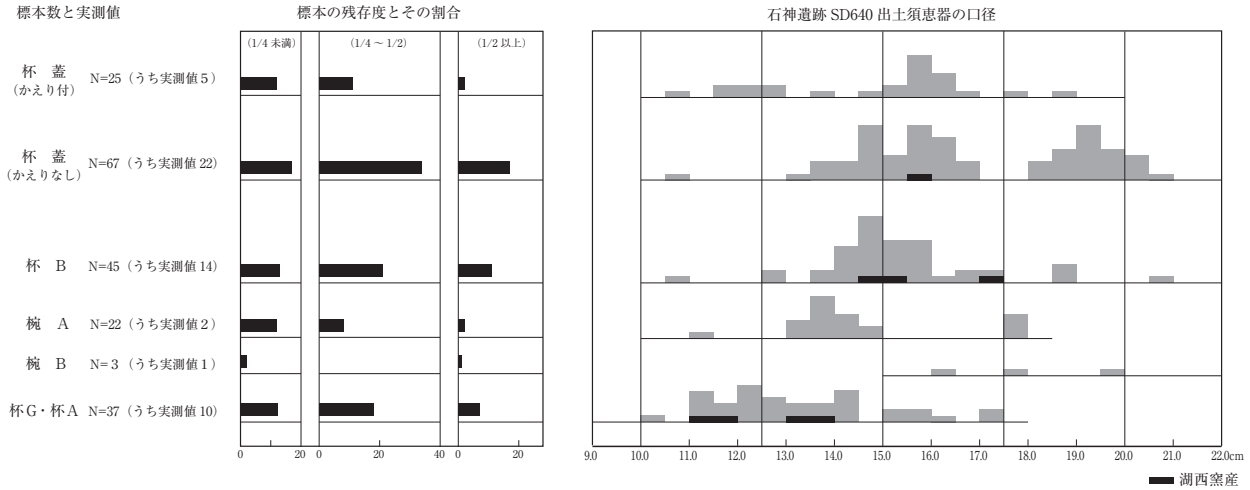

図185　石神遺跡SD640出土須恵器供膳具の口径分布

ただし、飛鳥地域から出土する湖西窯産須恵器供膳具は、図182からもあきらかなように、口径12㎝前後の杯Ａ（20・26～29・32～34）と口径15㎝前後の杯Ｂ（21・23・24）およびそれらの蓋（22・31）といった、小型食器としては標準的な口径のものに偏る傾向があり、供膳具でも大型や深手のものが多い尾張産須恵器とはいささか様相を異にしている。

具体的に、今回紹介した湖西窯産須恵器供膳具の約半数が出土した石神遺跡SD640出土品について検討してみよう。SD640出土須恵器のうち、湖西窯産の供膳具は上述のように杯蓋が１点、杯Ａが４点、杯Ｂが３点で、これらを同溝出土須恵器の口径分布図の中で示すと（図185）、杯蓋は大きいほうから２つ目のピーク（15.5～16.0㎝）に含まれ、杯Ｂも最頻値（14.5～15.5㎝）に近似するものが２点ある[15]。杯Ａは湖西窯産に特徴的な器形のものを含み、口径11.0～12.0㎝と、13.5～14.0㎝とに分布している。

前稿で報告した尾張産須恵器とは異なり、湖西窯産の供膳具はSD640出土須恵器の中で一部を占めるにすぎないが、杯Ｂとその蓋（「かえり」なし）とが口径分布の最頻値にほぼ重なってくる点が興味深い。尾張産須恵器は、石神遺跡における主要器種である口径16㎝未満の杯Ｂをほぼ欠いており、湖西窯産はこの点が異なる。杯Ｂの産地構成は複雑で、未だ産地構成の全貌を解明できてはいないが、一部を湖西窯産が占めていることは確かなようである。その一方で、尾張産が優占する無高台の椀Ａには、現在のところ確実な湖西窯産を確認していない。

どうやら、まとまった量の須恵器供膳具を飛鳥浄御原宮へ供給するべく生産を活発化させている点では共通してはいるものの、湖西窯には尾張の猿投窯や尾北窯とは異なる役割が求められていたらしい。

ところで、今回紹介した石神遺跡のSK764や含炭褐色土からは、飛鳥浄御原宮期の遺物と考えられる飛鳥Ⅳの土器群にともなって、古墳時代以来の伝統的な器形である杯Ｈ(14)とその蓋(31)が出土している。これまでにも、飛鳥Ⅳの土器とともに須恵器杯Ｈが出土している事例はいくつか知られていたが[16]、いずれも破片や整地層・流路埋土からの出土であったため、先行する時期の遺物の紛れ込みではないかとも考えられていた。しかし、今回報告したSK764出土の湖西窯産須恵器杯Ｈは、ほぼ完全な形を保って出土していることからも混入品とは考え難いもので、図示した伴出遺物と共時性を有すると評価せざるを得ない。

こうした飛鳥浄御原宮期における須恵器杯Ｈの残存については、すでに水落遺跡出土の尾張産須恵器の検討を通して前稿で指摘したところであり、産地を異にしてはいるものの、SK764出土品はまさにこの想定を裏付けるものである。関東地方でも飛鳥Ⅳ以降と目される暗文土師器に、湖西窯産や尾張産の須恵器杯Ｈがしばしば共伴するという指摘[17]があることを勘案するならば、普遍的な存在ではないものの、産地や遺構の性格によっては、飛鳥浄御原宮期に須恵器杯Ｈが残存していたことを、事実として承認すべき段階に達しているといえるだろう。

４　おわりに

これまで、７世紀の湖西窯産須恵器は基本的に東日本の太平洋沿岸諸国に流通したもので、宮都へは漆壺など内容物の容器として持ち込まれたものばかりであると考えられてきた。しかし、宮都たる飛鳥地域から湖西窯産須恵器の供膳具が少なからず出土することがあきらかに

なったことにより、従来の認識には大きな変更が必要となってきた。

とりわけ、湖西窯の中でも三河側の一里山地区で焼かれたものが多いのではないかという見通しが得られたことは、延喜践祚大嘗祭式に規定のある三河からの須恵器貢納との関係上、重要である。

もちろん、生産国の一致のみを根拠に飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器を短絡的に践祚大嘗祭式に規定された貢納品と結び付けて解釈することは適切ではない。しかし、践祚大嘗祭式や斎宮寮式に定められた土器（須恵器・土師器）の貢納国の分布は、主計寮式に規定された調納国の分布に先行し、令制成立当初の状態に近いのではないかという浅香年木の見解[18]は、飛鳥浄御原宮期の須恵器生産地構成（尾張・三河・美濃ほか）と共通する部分が多いという点ですこぶる興味深い[19]。

また小稿および前稿では、尾張・三河のいずれにおいても、飛鳥浄御原宮期にまとまった量の須恵器が飛鳥地域へ搬入され始めるのとほぼ同時期に、それぞれの地域での生産活動が活発化することを指摘したが、これは宮都での消費が各地の須恵器生産の動向に大きく影響していたことを示すと考えられる。このため、飛鳥浄御原宮期から宮都で大量消費されるようになる須恵器の生産地には、尾張や三河と同様にこの時期に生産活動を活発化させていた形跡を見いだせるのではないかという見通しをもっている。具体的には、備前・美濃（美濃須衛窯）などをその有力候補として挙げることができ、これらの産地の須恵器を飛鳥地域出土品の中から抽出する作業を通して、古代日本における須恵器流通の実態解明に挑みたいと考えている。　**（尾野善裕・森川　実・大澤正吾）**

謝辞

飛鳥地域出土品の比較資料として、湖西窯出土品を実見するにあたり、佐藤公保・鵜飼雅弘（愛知県埋蔵文化財調査センター）、後藤建一（湖西市教育委員会）・贄元洋（豊橋市文化財センター）の各氏から格別のご高配を賜りました。明記して深謝の意を表します。

註

1）資料集成の対象地域は、基本的に山田道以南の飛鳥川流域とした。

2）大阪府文化財センター『大坂城址 Ⅲ　大阪府警察本部棟新築第２期工事に伴う発掘調査報告書』、2006。清野陽一ほか「藤原宮大極殿院の調査―第186次」『紀要 2016』。

3）湖西窯産須恵器の産地比定に際しては、後藤建一（湖西市新井関所史料館長）・鈴木敏則（浜松市博物館長）の両氏に意見を求めた。ただし、最終的な判断の責任は尾野にある。

4）湖西市教育委員会『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』1992。

5）前掲註４）文献。

6）愛知県埋蔵文化財センター『境川遺跡』、1991。

7）以下、飛鳥Ⅰ～Ⅴについては、西弘海「藤原宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」『藤原報告Ⅱ』、1978を参照。

8）愛知県埋蔵文化財センター『東中田Ａ古窯』、2013。

9）芳賀陽ほか『東籠田古窯・橋良東郷古窯』豊橋市教育委員会、2003。

10）図示した湖西窯産須恵器は、1991年度の飛鳥寺1991-1次調査（『藤原概報 22』）で出土したもので、この調査の炭層Ⅱが1999年度に行われた第93次調査（『年報 1999-Ⅱ』）で富本銭が出土した炭層２にあたる。

11）図示した湖西窯産須恵器は、1999年度の第93次調査（『年報 1999-Ⅱ』）で土坑SK70から出土したもので、その後遺構番号をSK1170へと変更している。

12）これは、かつて西弘海が「律令的土器様式」成立の背景として「大量の官人層の出現」を想定したのと共通する視点である（西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考（小林行雄先生古稀記念論文集）』平凡社、1982）。

13）後藤建一『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房、2015。

14）国境を跨いでいることから、一里山地区を湖西窯とは別個の窯跡群（一里山古窯跡群）とする見解もある（前掲註９）文献）。ただし、壺・甕の口縁などに認められる製品の形態的共通性は、遠江側湖西窯と同系の陶工集団によって営まれたことを示していると考えられ、個々の消費遺跡出土品の産地がいずれであるかを厳密に見極めることは困難であるため、小稿では便宜的に一里山地区を湖西窯に含めて捉える立場をとっている。

15）前稿にて掲出した「図108　須恵器食膳具の口径分布」にも、SD640出土須恵器の口径分布を示しておいた。しかし、この１年間の整理作業により、計測資料が増加しているため、図185は前稿の図108を増補改訂している。

16）例えば、本薬師寺（1992-1次）下層SD152（『藤原概報 24』）、川原寺（1996-2次）下層SD367上層（『年報 1997-Ⅱ』）、藤原宮（飛鳥藤原第174次）SX10820・第二次整地層（『紀要 2013』）など。

17）福田明美「関東地方出土の畿内系土師器と湖西窯須恵器」『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会、1999。鶴間正昭「関東出土の畿内産土師器をめぐる須恵器」『東京考古』第20号、2002。

18）浅香年木『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局、1971。

19）ただし、霊亀２年（716）に河内から分かれた和泉からの須恵器貢納が規定されている以上、延喜践祚大嘗祭式の規定も７世紀に遡る令制成立当初の姿そのままではないと考えるべきであろう。

図186　檜隈寺周辺の地形図　1：15000